

## 聖サヴィヌス諸伝承の邦訳：サン・サヴァン修道院 史研究Ⅰ

森, 洋

<https://doi.org/10.15017/2235335>

---

出版情報：史淵. 107, pp.49-89, 1972-02-29. 九州大学文学部  
バージョン：  
権利関係：

Extrait du Loyerdaire  
du Monastere de St Cyprian de Poitiers

Incipit prologus storum Martynum  
Savini Et Cypriani.

Sancitimo prelatum no Cesario Alilepis et Valerius presbiterij  
laborem si qui quae digna et honesta, et aliter per pectus seculi laborum  
supra stylo aduersus qui dispendit, et tibi mendum et iustitiam, ut ab illis  
libenter conferte misericordiam. Et Valerius q pater alium martynum Savini  
et Cypriani fratris sui quibus aliqui ad Caliam Interfuerunt deoq  
ita memoria digna h. omnia videntur plebeio atente calamo, ut vultibus  
probat de pluribus pauca de in deo testes vestimenta. Scripserunt quos  
uestras tantum ostendere dignitas potuimus; ut qui illos vestra verum hinc  
firmasti eorum. Ceterum vestra ante nosum authenticos ualgetij.

INCIPIT  
PROLOGUS  
DE MARTYRIS  
SAVINI ET  
CYPRIANI

Explicit prologus Incipit passio

Anno Incarnacionis dominice quadringentesimo quinquagesimo octavo.  
Ludovicus et mariano in Amphipoli civitate italica (notabiliter primo tercio  
huncultus postitum. In eadem provincia in idolorum cultibus sepe bonum  
lect. exortat. Inven. cum pene tot simulacrorum laevi fuerent idolorum, lancea  
In Amphipoli urbe diuonij simulacrum immolabant circumfere se a b  
2 in usum et adorationem accepit. Dominico oratio dicitur. 2

Et tunc duo fratres Romanos notabiliter virtutes sapientia et sanctitate  
ae fidei principes de brevia civitate oritur, quos oratione inter Amphipoli  
Saurus videlicet et cyprianus qui. Ita die pro defensione laudis. Mirabilis  
fidei quam in dolo exultabat septem virtutum foris in sacali munda  
Cingent annis opprobret labatur in hominem prouidendo dicentes  
adde et intelligere que. Ita die sunt dii qui manibus fructu dimittit  
Nocturno talianis demouit unquam. Seditiones et reuertimini ad deum  
uicium. It. C. vng. nitens qui. Ita ex molo cum patre vendidit. Sicut  
ptalamia. Vestitus dicitur quia uerbo domini uel firmati sunt  
et spiritus eius omni uirtute. Ita die sunt qui in fine temporum per semetipsos  
hominem accipiens misericorditer nos redierunt, nam idola ludia ad  
uicium sunt quos tibi pater non possunt de cultu suos. Ita die  
et. Ita die redierunt et ad thesauri et uirtute. Ita die sunt qui in fine temporum  
et. Ita die sunt qui in fine temporum et. Ita die sunt qui in fine temporum  
Inaccessibilis uirtute. Ita die sunt qui in fine temporum et. Ita die sunt qui in fine temporum

# 聖サヴィヌス諸伝承の邦訳

—— サン・サヴァン修道院史研究 I ——

森 洋

## 緒 論

一九六九年十月一日から一九七〇年二月二十七日までの約百日間、吉川逸治教授を団長とするフランス中世美術史蹟学術調査団 (Mission japonaise d'Etudes de l'Art médiéval en France) が、昭和四十四年度科学研究費補助金をうけて、中仏サン・サヴァン・シュール・ガルトンブ (Saint-Savin-sur-Gartempe) 修道院教会堂の調査を行なった。この調査は、この有名なロマネスク壁画を中心とするものであったが、特に文献関係を分担した筆者は、三篇の報告をもってその責を果したいと思う。その第一は本篇で、この修道院が献げられている聖サヴィヌス (sanctus Savinus, saint Savin) に関する諸伝承の紹介と邦訳とにまつられ、以下第二に關聯する碑文・文献第三に修道院略史がこれに続く予定である。

聖サヴィヌス (聖サヴァン) に関する伝承は二種類ある。一つは聖サヴィヌスとその弟聖キプリアヌス (S. Cyprianus, saint Cyprien) との殉教記であり、これには、ボワチエのサン・シプリアン修道院長ガウスヘルトゥス (Gausbertus) の序 (Praefatio) と称するものが、別箇に残っている。他は聖サヴィヌスの遺体の奉遷 (translatio) の記で、これは、その遺体が発見され、現教会堂の位置に建てられた教会堂に移される物語りである。成立年代については後にふれるが、ここでは物語りの展開順により、I ガウスヘルトゥスの序、II 殉教記、III 奉遷記の順に配列した。特にIIは、この教会堂のクリプタ壁画の素材として重要である。

〔テキスト〕

上記の何れについても、モリストあるいはボランザイストの手になる刊本が存在している。

I GAUSBERTI ABBATIS Praefatio ad vitam SS. Cypriani et Sabini martyrum. Martène et Durand, *Theaurus novus Anedotorum*, t. I, Paris, 1717, réimp., New York, 1968, col. 151.

II De sanctis Martyribus Savino et Cypriano Brixiae in Italia, an Antiniaci in Gallia, *Acta Sanctorum, Julii*, t. III,

聖サヴィヌス諸伝承の邦訳 (森)

(Die duodecima Julii), Paris et Rome, 1867, pp. 184-189.

III Acta Translationis S. Savini Martyris, Migne, *Patrologia Latina*, t. CXXVI, Paris, 1852, col. 1051-1056. ⅴのチヌス ⅴ<sup>5</sup> Martène, *Veterum scriptorum et monumentorum historicorum, dogmaticorum, moralium amplissima collectio*, Paris, t. VI, p. 806 sq. からのまき採られたものである。

以上のうちⅠは、改行すら一箇所もない文章である。Ⅱは三章三二節(序言 Prologus Ⅱ1、第一章 Ⅱ2ⅰ、第二章 Ⅱ10ⅰ、第三章 Ⅱ21ⅰ32)に分たれて、序と各章の冒頭、すなわち第1、2、10、21節にあたる部分は、何れも節番号がふされていない。Ⅲは著者に擬せられているサン・ジェルマン・デ・プレの修道士、アイモイヌスの序(Aimoini Praefatio)を1とし、全部で十一節から成る。これらの章節割りは、編者が便宜的にほどこしたものであろうが、邦訳ではさしあたりこれを踏襲した。

〔手写本〕

上記テキストのⅠは欄外に「ボワチエの聖キプリアヌスの手写本より」(Ex ms. sancti Cypriani Pictaviensis)と記されており、Ⅱはその本文に先立って、「ブレッシアのサンタ・カタリーナ修道院で使用されていた、個々の聖務の手書き説諭本より」(Ex Lectionibus MSS. Officii proprii, in coenobio S. Catharinae Brixiae asservati)と記載されており(p. 184 E)。Ⅲは「本文標題のまげんに、編者の緒論(observatio praevia)に先立って、これが「国難尚書シメウザランの手写本から」(ex ms. illustrissimi domini Chauvelin, regiorum sigillorum custodis)と記されている。シメウザラン(Germain Louis Chauvelin, 1685-1762)は一七三七年に職を追われているから、彼がビプリオフィルぶりを發揮したのがその後のことであつたとしても、このシメウザラン本は十八世紀前半以前の手写本でなければならぬ。

Ⅲについてはさらに、ボワチエ市立図書館蔵のドン・フォントノーの手写本(Manuscripts de Dom Fonteneau)——全八九巻、その第二五巻と第八〇巻とにサン・サヴァン関係史料の大部分が納められている——第八〇巻に「ボワトウのサン・サヴァン修道院の歴史に供する覚書」(*Mémoires pour servir à l'histoire de l'abbaye de St. Savin en Poitou*, Mss. de dom Fonteneau, t. LXXX, p. 567 sq.)があり、その第二巻がまぎれくこの奉遷伝承にあつてはいるが、そのなかに一部(ce 5<sup>e</sup> o 節)をラテン語に引用しながら、これが「この修道院に保存されていた、ゴティック文字で書かれた古い聖務日禱書から」(d'un vieux bréviaire écrit en lettre gothique gardé au Monastère, p. 574)とされたものであると記している。この引用部分は、筆者が「シーニョ本——すなわちシメウザラン本——と照合した結果、殆んど變りはない。この覚書の筆蹟は、ドン・フォントノー(Dom Léonard Fonteneau, 1705-1780)のそれ

——あるいはその後——と考えられ、彼は一七六九年までこの地方の史料文献採集にあたっていたから、この覚書はその後のもの、すなわち一七七〇年以降のものである可能性が強い。従ってこの年代頃までは、サン・サヴァン修道院に「ゴティック書体の聖務日禱書」が存在していたと思われる。このテキストと酷似していたと考えられるショウヴァン本は、後にこれが一七四〇年前後に彼の蔵書に入ったとすれば、明らかに別本である。

Ⅱのテキストには、上記の聖者伝集成に納められたそれの他に、ドン・フォントノー手写本集成のなかに、独立の手写本がある（写真参照）。これは第八〇巻の三八三頁から三九三頁にいたり、三九三頁の半ばで、ただちに「聖キプリアヌスの殉教記がはじまる」(Incipit passio b. Cypriani)。そして後者は四一〇頁にいたる。プロスペル・メリメはこの筆蹟について、あるいは「古い筆蹟」(écriture ancienne)と記し、あるいは「極めて見事な筆蹟で、私には十七世紀初に属するものと思われる」と記しているが、この見解は妥当であり、筆者もこれを、おそらくはサン・モール会がこの修道院に定着した一六四〇年八月二十九日直後あたりに書かれたものと考えたい。しかしての手写本は、その冒頭によって「ポワチエのサン・シプリアン修道院の聖者物語集からの抜萃」(Extrait du Legendaire du Monastère de St. Cyprian de Poitiers)であることが明らかであり、従って我々は、Ⅱに関する限り、ボランディストが用いたブレッシアのサンタ・カタリーナ修道院本（以下ブレッシア本ⅡBと呼ぶ）と、本写本（以下ポワチエ本ⅡPと呼ぶ）とを併用し得ることになるのである。

- (1) B・Pの両者を校合した結果、もっともはなはだしいのは語の配列順序の相異であるが、しかもそのことによって物語りの内容や展開は些かも変化を来していない。
- (2) ただしPには、Bにおいては欠落している一行ないし数行の部分が三カ所（14・18・30節）にあり、30節の部分は、これがない限り物語りの筋が通らない。
- (3) Bの編者たるボランディストはPを見ていない。何となれば彼らは緒論において、本文序冒頭の献辞に司教名が欠けていることを非難しているが（p. 182D）、Pにはこの司教名がゲルマヌスと明記されている。
- (4) Bの欄外には、異本の読みが記入されている。これらの大部分はPと合致するが、数カ所にわたって合致せず、しかもその前後の文章も異っている。
- (5) メリメはPをLABBE, *Nova Bibliotheca manscriptorum*, t. II, 1857, p. 685. と校合して、本質的な差はないと言っている<sup>26)</sup>。一方Bは、その注の多くをラップによっている。従ってBに見られる異読はラップのそれであるかも知れない。
- (6) Pには27節以下に目立って悪い箇処があり、その原本から解読出来なかったと思われる数語を横線でつないだり（26・27・29）、あ

るいは欠落のまま放置したりしている(32)。これらは何れもBによって補填され得る。

(7) Pは、これを用いたメリメによって、「唾棄すべきラテン語、誇張された文体」と評されたが、ラテン語の誤綴にみちている。一方Bは、ボランディストの努力にもかかわらず、句読点がまことに悪い。

以上の所見から筆者は、BとPとを共通の根から出た、しかも相当にはなれた二写本であると判断したい。BはおそらくP系統の、しかもP自体ではない、テキストと校合されている。

B・P両テキストの系列のちがいを最も明らかに示しているのは、読誦(Lectioes)の切り方に見られる相違である。修道院の聖務日課においては、その修道院が献げられている聖者の祝日には、特に夜課の際に、当該聖者の伝記あるいは殉教記が、重要度に応じて、三乃至十二読誦に分けて読み上げられた。Bはこれを六読誦に分けて、これを欄外に明示している。Pにおいては唯一カ所、三八三頁の欄外に、《Lectio》と記されているのみであるが(写真参照)、直後の《Bruit》という語が特に大きく書かれているのが認められる。文中にはこうした、あるいは太く、あるいは大きく、あるいは飾りをつけて書かれた語または文字が全体で九カ所ある。これらを読誦の切れ目の場所を指示するものと考えれば、Pはこの殉教伝を十読誦に分けていたことになる。

Pにおける十読誦は、長短さまざまであるが、第一読誦が目立って短かい。このことは如何に説明するべきであろうか。またドン・フオントノーの手写本が、当時入手可能なサン・サヴァン修道院関係の文献を——量は極めて少ないが、——網羅したとすれば、何故にIとIIIとがこれに含まれていないのであろうか。この理由は一括して次の如くに推定され得るであろう。

- (1) ポワチエのサン・シプリアンの手写本からとられたという序文(I)は、本来はPの原本とともにあって、第一読誦を形成していた。
- (2) 序文をとまなうPの原文には、本来奉選記(III)も附属していたであろうが、この部分のみはシヨウヴランの蔵書に移った。(したがって我々は、I・II・IIIをもとに含んでいたサン・シプリアン本II Cの存在を推定し得るであろう。)

- (3) Pの筆生は、おそらくその後Cを筆写し、したがってこの聖サヴァン・聖シプリアン殉教記(II)が終るや、ただちに聖キプリアヌス殉教記を続けた。

我々はボランディストの緒論(Commentarius praevius)によって、プレッシアのサンタ・カタリーナ修道院に対して、聖サヴィヌス、聖キプリアヌス両聖者がプレッシア出身であることを理由にして、彼らの殉教記を、おそらくはガリアから持ちこんで、読誦として課したのが、十五世紀半ばのプレッシア司教、ペトルス・デ・モンテ(Petrus de Monte)であったであろうことを知っている。これはB・P両系列の分岐がこの年代より遙かにさかのぼり得ることを示している。筆者の印象ではPの方がむしろ素性が良いように思われるが、両者の本格的な比較は、後日Pを底本としてテキストを作製する際にゆずりたい。

〔物語りの内容と成立〕

Iによれば、IIの殉教記——ちなみにBはこれに標題らしいものを付して居らず、Pのみがこれを「殉教記」(Passio)と呼んでいる——は、ポワチエ市壁外のサン・シプリアン修道院長ガウスベルトゥスが、聖サヴィヌス・聖キプリアヌスの事蹟を集めて、これを「物語り風」に記したものの如くであり、マルテーヌとデュランは、理由を記すことなく、この序に一〇二九年という年代を与えている。ガリア・クリステイアーナは、サン・シプリアンの第十代院長として Gislebertus をあげ、彼がサン・ブノワ・シユル・ロワール修道院長にして、有名な文人・学者であったアボ(Saint Abbon de Fleury, abbe, 988-1004)の血縁者であること、またこの人物が一〇〇三年に「サマリターニ」(Samaritanii)と共に住つた Gaudertus と別人であるとは認め難いことなどを述べている。但しこの修道院の一〇二九年頃の修道院長は第十三代 (Adalgisus) または第十四代 (Fulcaudus) にあたるから、ガウスベルトゥス修道院長の存在は認められても、彼が一〇二九年にこの序を書いたことを認めることは不可能である。筆者は従つてこの序文は、文人アボの血縁者ガウスベルトゥスの記憶が強く残っている時期、すなわち彼の死後半世紀前後の頃に、文人アボの令名に便乗して、またおそらくは殉教記の成立後に、サン・シプリアン修道院で書かれたものと考えたい。またこの文体から判断する限り、この筆者は殉教記そのものの筆者と同一人ではないであらう。

IIの「殉教記」は、それが自称するところによれば、四五八年に、ブレッシア (Brixia, Brescia) 出身のサヴィヌスとキプリアヌスの兄弟が、仮空の町アンフィポリス (Amphipolis) についてガリアの各地において、プロコンスル・ラディチウス (Ladius, Laticius) とマクシムス (Maximus) とによつて迫害なれつゝ多くの奇蹟を行ない、ついにサン・サヴァンから約三軒のアンティニイ付近で斬首され、「二本の糸杉の丘」——今日のモン・サン・サヴァン——に葬られる経緯を、その一部始終の目撃者アスクレピウス (Asclepius) とヴァレリウス (Valerius) の二司祭が記述して、——Pによれば——司教ゲルマヌス (おそらくは両聖人が旅の途上立寄つて歓待をうけた聖ジェルマン・ドーセル Saint Germain d'Auxerre, 26節) に献じたものである。内容は荒唐無稽で、一見してこれらが事実に基づくものではないことを示しているが、ポランディストはその緒論で「四項目にわたつて矛盾を論じ、これを偽書 (Acta suspecta) と断じた。しかし我々はここで、書かれたことが歴史的事実であることを要求するポランディストと同じ立場に立つ必要は必ずしもないから、さしあたり非常に顕著な矛盾を指摘しておけば充分である。

- (1) 両聖者の生地は北伊のブレッシアか、あるいはガリアのブレッスカか。近代の聖者伝学者にはブレッサ説をとるものもいるが、BもPも共通して Brixia の読みをとつていたので、邦訳でもブレッシアをとつた。<sup>(1)</sup>
- (2) これらの事件が起つたと記されている時期に、聖ジェルマン・ドーセルはすでに死亡していた。この司教は、ポランディストの

指摘をまつまでもなく、四四八年七月三一日にラヴェンナで歿した。

(3) その治下にこのことが起ったと記されている東ローマ皇帝マルティアヌス (Martianus, 450—457) は反キリスト教ではなかった。このことは彼の治下にカルケドン公会議 (451) が開かれていたことから明らかである。

以上の如くしてこの殉教記については、外層的には勿論のこと内層的にもその成立時期を指示する要素がない。これは少なくとも三種の聖者伝——オーセールの聖ジェルマン、トロワの聖サビニアヌス、コンスタンティノーブルの聖モキウス——によって構成されたものである。<sup>(12)</sup> この中で我々は、トロワで、アウレリウス帝の治下に斬首によって殉教したという聖サビニアヌス (S. Sabinius, saint Savinian) に興味をひかれる。彼の異教徒の父は正にサヴィヌスであり、物語りの展開も酷似しているからである。この最古の手写本は十世紀のものであるから、聖サヴィヌスと聖キプリアヌスとの「殉教記」の著者がこれを利用しているとすれば、その成立年代は十世紀から十一世紀後半 (Iの序文の成立期) までの間である。筆者は文体から、成立年代として十一世紀の第三四半期をとりたい。またこの著者は、サン・サヴァン周辺の地理に比較的明るいことと、また聖サヴァンが物語りの中で終始兄としてイニシァティヴをとっていることから、この著者はサン・サヴァンの修道士であると考えたい。

Ⅲの「奉選記」<sup>(13)</sup> は一応サン・ジェルマン・デ・プレの修道士アイモイヌス (Aimoins, Aimoïn, † 9 juin, apr. 896) に帰せられてくるが、モリニエは無条件にこのことを否定し、あわせて——理由をあげずに——これを十一世紀のものとしている。この物語りの内容は、メリメがその素朴さからその古さを推定したにしても、何らの現実の反映も感じられない。冒頭に修道院長故フクベルトゥス (Hugobertus) の名が見られるが、ガリア・クリステイアーナによれば、サン・サヴァン修道院にこの名の修道院長はいない。しかし同じくガリア・クリステイアーナによれば、他にフクベルトゥス修道院長は二人いる。一人は八六二年にサン・マルタン・ド・トゥールの修道院長となり、一人は八九二年にサン・ジェルマン・デ・プレの修道院長となっている。<sup>(14)</sup> 一方では、この「奉選記」がアイモイヌスの文名に便乘していること、他方では、この物語りの中で「奉選」に主役を演ずるバイディルスが、トゥールのマルムーティエの修道院長とされていること (6節、ミニーヌ版の緒論が指摘する如く)、<sup>(15)</sup> この名の修道院長はいない) が、上記二人のフクベルトゥスの何れにも可能性を残しているが、(1) この物語りの内容が今日認められている修道院の成立事情 (続稿にゆずる) とおよそかけはなれていることと、(2) この物語りの筆致には、地理的感覚が一切感じられないことから、筆者はむしろ地理的にも時間的にもよりかけ離れた、サン・ジェルマン・デ・プレのフクベルトゥス修道院長をとりたいと思う。従ってこの「奉選記」の成立は、八九二年から約半世紀以内、十世紀半ばのサン・ジェルマン・デ・プレ修道院に属して、十一世紀までは下らないのではないだろうか。



〔翻訳と付注〕

IとIIIについて訳者は、上記刊本テキストを、出来るだけ逐語的に訳した。IIについては、Bから、テキストとともに、その章節制りとリュブリックとを踏襲し、Pを併用して、同じく逐語訳を試みた。訳文のうち「」でくくった部分はBにあるもの、「(」でくくった部分はPのみにある部分である。したがってBとPとの間に表現の相異がある場合には、訳文も二重になっている。Pのみに存する長い文章についてはその都度注記した。原則として地名は現行名を、人名は原文の読みをとった。但し偶像ディオニソスは、B・P何れもこれを *Dionysius* としているが、妥当ではないのでディオニソスに統一した。

読誦については、Bのそれはテキスト通りに欄外に訳出し、Pの読誦の切れ目と思われる部分には、訳文中の該当箇所と欄外とに§印を付した。その他欄外には、IとIIIについてはそれぞれが納められている集成のコロンヌ番号を、IIについては「」内にBのページ数を、「(」内にPのそれを付した。

訳注は特殊なものを除き、出来るだけ避けた。ただIIの場合に、Bには十四ヶ所の注があるが、その大部分はポランディストが緒論で展開した、内容が歴史的事実ではないことを論証する対応箇所を指示したものである。この注を採用した場合には(原注)と記し、訳注と区別されている。

なお、これらのテキストの何れにも聖書のレフェランスがないので、訳者が発見し得た限りはこれを訳注に付した。本稿が成るためには、調査団員諸氏の御協力もさることながら、ポワチエ大学のクロゼ名誉教授、同大学中世文化史研究所長ラバンド教授、ラバンド夫人、ファヴロー氏等の適切な助言を必要とした。また、ドン・フォントノー手写本の閲覧及びマイクロフィルム撮影については、ポワチエ市図書館長ゲラン氏の御好意にすぎた。さらに翻訳の作業を進める上では、福岡大学助教授河井田研郎氏及び九州文学部助手岸チズ子氏の多大の協力を得た。識して感謝の意を表するとともに、この拙なき邦訳を、サン・サヴァン研究の先駆者にして、恩師である、調査団長吉川逸治教授に献げさせていただきたいと思う。

注

- (1) *Manuscrit de Sainte Radegonde de Poitiers et les peintures de XI<sup>e</sup> siècle*, Paris, 1970, p. 62; J. JAC-QUEMET, *Catholicisme, Hier, aujourd'hui, demain, Encyclopedie en 7 volumes*, 4, p. 1424, v°.
- (2) P. MÉRIMÉE, *Notice sur les peintures murales de*

*l'église de Saint-Savin-sur-Gartempe*, Paris, 1945, p.

63 et 45.

(㉟) MÉRIMÉE, *op. cit.*, p. 34.

(㊱) MÉRIMÉE, *loc. cit.*, p. 15.

(㊲) *id.*

(㊳) E. PELLEGRIN, Notes sur quelques recueils de vies de saints utilisés pour la liturgie à Fleury-sur-Loire au XII<sup>e</sup> siècle, dans *Bulletin d'information de l'Institut de recherche et d'histoire des textes*, C.N.R.S., n° 12 (1963), Paris, 1964, pp. 7-30.

(㊴) AASS., *Julii*, t. III, pp. 181-183.

(㊵) MARTÈNE-DURAND, *Theaurus anecdotorum*, t. I, Index chronologicus (sans pagination).

(㊶) *Gallia christiana*, t. II, Paris, 1720, réimp., 1970, col. 1283.

(㊷) Mgr P. GUÉRIN, *Les Petits Bollandistes. Vies des Saints*, 7<sup>e</sup> éd. revues, corrigées et considérablement augmentées, t. VIII, Paris, 1888, pp. 243-245. 其ノハキリスト教ノ歴史ノ一頁ニシテ「...e castro Transalpino, dicto Bresse, haud procul a fluvio Rhodano...」(p. 183D) 此ノキリスト教ノ歴史ニ於テ「Bresse-sur-Groane (ar. Chalon-sur-Saône, c. Sennecey-le-Grand) 此ノキリスト教ノ歴史ニ於テ「Bresse」ナルハ

キリスト教ノ歴史ノ一頁ニシテ Bresse 此ノキリスト教ノ歴史ニ於テ「Bresse...」トシテ記述スルモノナリ

(㊸) L. DUCHESNE, *Fastes épiscopaux de l'ancienne Gaule*, t. II, Paris, 1910, p. 445.

(㊹) Y. LABANDE-MAILFERT, *Saint-Savin ou le miracle roman*, p. 13 (dans *Poitou roman*, 2<sup>e</sup> éd., 1962, p. 135.)

(㊺) AASS., *Januarii*, t. II, pp. 939-941, 941-943, 944-946. Cf. A. MOLINIER, *Les sources de l'histoire de France*, t. I, Paris, 1901, p. 25, n° 66; J. de MAILLY, O. P., *Abrégé des gestes et miracles des saints*, traduit du latin par Antoine DONDAINE, O. P., Paris, 1947, pp. 126-130, n°32.

(㊻) MOLINIER, *op. cit.*, I, p. 254, n° 828.

(㊼) MÉRIMÉE, *op. cit.*, p. 20, n. 3.

(㊽) *Gallia chr.*, t. XIV, Paris, 1856, réimp. 1970, col. 166.

(㊾) *Gallia chr.*, t. VII, Paris, 1744, réimp. 1970, col. 430-1.

(㊿) MIGNE, *P. L.*, t. CXXVI, Paris, 1862, col. 1049-1052 (*Observatio praevia*).

## I 殉教者聖キプリアヌスおよび聖サビヌス伝に対する修道院長ガウスベルトゥスの序

教会の諸知識の研究により、無缺なまでに完成されたる、また愛の絆によって我と分ちがたく結ばれたる、最愛のボツと最も静謐なるフリデリクスへ、あらゆる修道院長のうちで最も愚かなる我ガウスベルトゥス、終りなく続くべき主の歡びを贈る。筆によって武装したキリストの闘技士たちのある者は、古き先達よりうけついで簡潔さをもって、獣皮紙のうゑに信仰の闘いを記述したが、これは我らの時代の信仰篤き人々に対する教本としては、神の捷の理解の代りに、味けなさを与えるものである。とにかく人々はむしろながたと樂しめる書巻を好み、これらは、饒舌な語り口の習慣と合致して、仰々しい尾緒によって、耳という器官をくすぐるのである。實際ある人々には、より広範な、そしてそれに即席で言葉を加えることによって引のばされたものが、より豊かでより楽しみにとむと考えられている。何となれば大袈裟な話し方をするものは、当然それに伴って、短い散文の表現を避けるからであるが、彼らはかの短い筆致で意志を伝えた古代人の努力を損なうものではまったくなく、かえって神のすべての讚美の上に稱讚をつけ加えるものである。彼らは、彼らが詩篇詠誦者とともに、神の聖者を通じて神を賞めまつる際には、まこと一途に神の不思議を、神の聖者を通じて宣べ伝えているのである。事情がかくのごとくであった折しも、何れかと言えば、ポワチエの市壁の傍に位置する、殉教者の栄冠をうけたキプリアヌスの修道院の兄弟たちの懇願もだしがたく、我々は、この最も顕著なる神の戦士と、彼自身の兄であるサヴィヌスとの信仰の戦いの功業を、より長めにかつ物語り風に書くことによつて、まとめるように意を用いた。しかしながら栄光は彼らによつて我らに与えられるものではなく、かえって上に名をあげた、その御方に帰せられる。この御方は、彼の証人たちが著るしく栄光あるものなることを知りたまうたし、彼らをこの世の時の以前から、天の嗣業の市民たらしめることを、予知し予定したまうた。そして最後に我らは、かかる意図をもって企てられたこの仕事をやりとげ

るに足る峻厳なる魂を、我らの祈りによって求めまつる。この魂は、これが持続すれば、貧しき教えの庭を、北風から遮られたものとなし、我らの内に神の讚美の若芽を育くみ、また育くみつつ聖化するのである。我が聖化すると言うは、神は我らを、神が告げたまうた約束の言葉によって、無償の御慈悲をもって憐みたまうであらうからである。これは、汝の口を開けよ、我それを満さんと言われた如くである。事実我らは、かの御方に、我らの口を開きたまわんことを求めまつる。彼はその叡知をもって、物言わぬ口をひらき、幼児の言葉を理にかなったものとなしたまう。我がかの御方と言うは、信仰なきアヘズ王が立去った後に、しかも邪悪なる会話によって唇が穢れていると判断したイザヤの予言する唇を、鉗で祭壇よりとりたる炭火をもって、潔めたまいし御方である。最後に我々は、これを卓越した読誦文に導入して、定められたる祈りに加えんとするものである。

(1) 《*combustuminatus*》. Du Cange, *Glossarium mediae et infimae latinitatis*, v° *comburnio*, *Bitumine conjungere*. 瀝青によってくっつけるの意。引例としては当該箇所のみを挙げてゐる。

(2) 詩篇、第八一(八〇)篇、11。

(3) イザヤ書、第六章、6、7。

## II 「聖殉教者サヴィヌスおよびキプリアヌスについて

イタリアではブレッシアの、あるいはガリアではアンティニイの

偽書

ブレッシアのサンタ・カタリーナ修道院で使用されていた個有の聖務の手書き読誦本より

序言

(ボワチエのサン・シブリアン修道院の聖者物語集からの抜萃)

聖殉教者サヴィヌスおよびキブリアヌスの序言はじまる。

読誦一

もろもろの司教のうちで最も聖なる(ゲルマヌス)殿へ、司祭アスクレピウスおよびヴァレリウス、挨拶をおくる。聖なる父よ、做うにふさわしきことどもや、さらにその他この世に有益なることども、すなわち諸聖人の勝利は、記述する文体が野卑であっても、「神から恵みを得んと欲するものに」(これらに倣わんと欲するものに)褒賞と健全なる癒しをもたらすものである。ところで貴重なる殉教者サヴィヌスとその弟キブリアヌスとの勝利を、それらに最後まで立会っていた我々は、物語るに相応しいものである。何となれば、伝記類は、「我々が卑俗な筆を用いて書いたにしても、」(我々は俗人のような筆を用いるにふさわしいものであろうが)一般の人々に益をもたらすに足るものだからである。我々は多くの中から僅かを、とは言え、神が証人となりたまう如くに、最も真実なることを記した。これらは汝の聖性に捧げるに値すると我らが考えたところであって、これすなわち汝が彼らを汝の祝福をもって確認したまい、彼らの信仰の闘いを、今汝がふたたび述べひろめたまわんがためである。

(序言は終り、殉教記始まる。)

〔第一章 聖人たちの信仰におけるゆるぎなさとの拷問〕

主の化肉の四五八年に、イタリアのアンフィポリスの町でラディチウスとマクシムスとがコンスルたりし第六年に、異

教徒の予期されぬ群衆が、突如としてこの属州に偽りの神々の礼拝のためにあらわれた。ところでほとんど全てのものが神々の像に犠牲をささげたが、しかもアンフィポリスの町では、人々は悪魔的な罪悪に毒されて、ディオニソスの像から生命と助けとを亨けたと信じ、この像に生贄をささげた。§ 当時二人の兄弟がいたが、高貴な家系において、知識において、聖性において、(さらに)信仰において、「さらになかんづく貞潔において」抜きんでおり、アンフィポリスの近くの

[p. 185]

のプレッシアの(町の)出身であった。彼らはすなわちサヴィヌスとキプリアヌスとである。彼らは毎日、人々が偽りの神の故に廃棄した聖なる「三位一体の」信仰を擁護するために、俗人の職に任ぜられていたにもかかわらず、救いにいたる「三位一体の」途を説くために、自らを壁としてすべての人の前に立ちはだかった。曰く。見よ、そして知れ。人の手によって作られたものは、神々ではないのであるから、偽りの神の狂気沙汰と、悪魔どもの誘惑とを捨てよ。そして生ける神、我らの主なるイエス・キリストに帰れ。彼が父とともにすべてを無から創りたまひしことは、詩篇作者が、もろもろの天は主のみことばによりて成り、天の万軍は彼の口の氣いそによりてつくられたり、<sup>1</sup>と言つて証しした如くである。

(1) 詩篇、第三二(三三)篇、6。

[p. 384]

3、彼はその生涯の終りに、自から人を「救うものとして」(嘉しとして)、我々を慈悲深くも贖いたまうた。ところで偽りの神々は、聲であり、「啞であり」(多数であり)、そして愚かしいものであり、それら自身が役に立ち得ないし、それらを礼拝するものを聾や啞や愚かしいものとなして、地獄の獄舎へと曳いて行くものである。しかしながらキリストは、一人子、長子にましまして、永遠なる神と同じ実体をもち、ともに永遠に生きたまう息子であり、我らの無知と不信との黄泉をてらす、近寄りがたい光であらせたまう。「このように」彼等は、かかる救いをもたらすべき戒めによって、家郷の町「プレッシア」でも、すでに述べた如くに「プレッシアの」隣りにあるアンフィポリスでも、人々を説くことをやめなかった。しかし人々はこの戒めに嫉みをいだき、反対に、すでにのべた忌わしい偽りの神ディオニソスの周年祭に

は、従來の習慣通りに、もっぱら犠牲をささげ、饗宴をはってこれを称えた。

4、ところで前述の恐ろしきディオニソスの祭りから五カ月目に、プロコンスルのラディチウスが、ディオニソスに犠牲をささげるためにアンフィポリスに來た。そして翌日には、「ブレスシアの町から來た」サヴィヌスとキプリアヌスの兄弟が（ブレスシアの町から來て）、自らをキリストの兵士であると言い、新しい教えを「もたらし」（主張し）、死人であり、しかも十字架にかけられたイエス・キリストを、「真の」神の子、真の人、かつ真の神であると言い張って、人々をまどわし且誘惑し、またこのことの故に、偽りの神々「の礼拝から」（を拝むもの）多くが引はなされたと、彼に知らされた。その上さらに人々は「熱狂して」（歓声をあげて）プロコンスルに懇願した。群衆とは彼らが始めたことをとことんまでやりぬくものであるから、プロコンスル殿よ、もしも汝が彼らに今やっていることを認めたならば、すべてのものがキリストを信ずるようになるだろうし、また人々は我らの供犠を愚かなことと考へて、我らのディオニソスの（神の）信仰は、ことごとく廢れてしまふであらう。

## 読誦二

5、§ プロコンスルは恐怖の余り極度に興奮して、町の一段高い場所にある裁判官席に座して、キリストの兵士たち、すなわち聖サヴィヌスと（彼の弟）キプリアヌスが彼のもとに連れてこられるように命じた。そして（プロコンスルは）彼らに言った。汝らは何処のものか、また如何なる名で呼ばれているかを私に述べよ。これは先ず汝らの家系を知ることによつて、より容易に汝らの魔法の技の秘密が発見されんがためである。と言うのも汝らは単にディオニソスに犠牲をささげなかつたのみならず、しかもさらに「彼に」犠牲をささげんと欲するものたちを誘惑して背をむけさせているが、我々は汝らが如何なる信仰、あるいは力によつて「この」（これらの）ことをなすのかを知らないからである。聖サヴィヌスは答えた。汝は真理も神の力も知らないが、何故に汝はすべての真理を憎悪しながら、我らを尋問するのか。し

かしながら先ず汝の心に理解力を備えよ(貯えよ)。そして誰が汝を魂と肉体とをもって造りたまひしかを想え。かくて汝は真理を識るであろう。ところで我と我が弟とは、聖書を学んだが、そのなかに我々は、異教徒の偶像が人の手の業であるが故に、これらが、自ら益をもたらすことも出来ず、他人を助けることも出来ない所以を、また汝らがこれらのなかにあると「認めている」(信じている)権威も、永遠にこれらと共に「愚かしいものとして」廢れるであろうことを学んだのである。

6、ラディチウスは言った。汝らが饒舌である「が故に」(ことから)、汝らが学んだことと、しかもなおかつ汝らが「嘘言に」(嘘つきに)信をおいていることがわかる。聖サヴィヌスは(彼に)答えた。我らが饒舌であるのは事実であるが、汝が真実を「知らんが」(知る)ためには、我らの語ることを、より注意ぶかく聞け。事実主は御自から彼を信ずるものたちに約束しておられる。曰く、汝らが王たちまたは裁判官たちの前に出た際には、如何にして、あるいは何を汝らが語るかを思慮らんと欲するな。何となれば、我は汝らに、汝らに反対するものどもが抵抗し得ぬ口と智慧とを与えるであろうからと。<sup>1</sup>従って、我らは神について語るものであるから、我らの饒舌は我らのものではなく、神のものである。汝らが拜む神々は金属製であり、すでに言った如くに鑿で、啞で、愚かしい、悪魔によって神化された偶像である。ラディチウスは言った。もしも汝らが犠牲をささげたならば、汝らは命びろいすることに「なろう」(なる)。聖サヴィヌスは答えた。我らの益はキリストの名において死ぬことである。<sup>2</sup>そこでラディチウスは聖キプリアヌスの方にむきなおって、彼に言った。そして汝はその若さで、何をもって我が神々に犠牲をささげないのか。聖キプリアヌスは答えた。(まことに)我は汝に「衷心から」(ことごとく)言いあらわす。すなわち我は汝の神々に犠牲を供げぬであろうし、かえって我が神、天にて父の右に座すイエス・キリストを崇めまつると。

(1) ルカ伝、第二章、12と15。



(p. 385)

7、ラディチウスは言った。彼らを吊し、「鉄の爪で引裂き」(油を塗り)、頭から踵まで、彼らの骨が露出するまでたたけ。またこうして「おのずから万人が」(人々の間に)神々を冒瀆することなく、しかも(へり下った)彼らに「うやうやしく」犠牲をささげるように教えるがよい。そこでプロコンスル・ラディチウスの兵士たちは、恐ろしい命令に従って、彼らを「鉄の爪で裂く」(鉄の爪で裂いた)。しかし彼らは、裂かれている間、大声で叫びかつ語って、「キリストに」(神に)感謝をささげた。主イエス・キリストよ、汝は父とともに終りなく続べたまひ、正義の根源として、我ら汝の僕たちに汝の慈悲を示したまうことにより、いたるところに光を与えたまう。殉教を耐えしのぶ力をもたらしたまえ。汝の「聖なる」(至聖の)掟「の故に」(との間に)、今行なわれている信仰の闘いに際して、我らにゆるぎなき信仰を与えたまえ。しかしこれらことを「彼らが」(彼らから)「言った」(言われた)ので、両聖者は、すでに「両足は」(あらかた)裂かれていたが、彼ら「の肉」が「ほとんど」骨まで「破壊される」(なくなる)までにひどく、下役たちから責められた。二人の司祭、すなわちアスクレピウスとヴァレリウスとは、この見世物に居あわせたが、両聖者の残忍な責苦を目のあたりに見て、彼らが誰であるかを公けに示すことを敢えてせずに、「永い間身をかくしていた」(香油を塗った)。

8、しかしその間中、刑執行吏たちは責苦の手を休めることを欲しなかったにもかかわらず、しかも忌むべきラディチウスは、依然として聖人たちに好意をもたぬものどもに、彼らを拷問から解きはなつように命じた。そして(これらの)後に彼らが生き生きとした顔つきで、神を讃め称えながらラディチウスの面前に引出されると、ラディチウスは彼等に言った。もう「そろそろ」多くの拷問から免れるために、ディオニソスに「犠牲をささげよ」(犠牲をささげたらどうだ)。

聖サヴィヌスは彼に言った。何と馬鹿げたことよ。青銅の彫像が、人の技で造られたものが、「汝は確たる理由なしに神になつたと言うのか。」(感情もなく動けぬものに造られたものが、汝によれば神なのか。) 汝は極悪の犯罪人ではあるが、我らを真理の途から逸らすことは出来ないであろう。汝はすでに、汝の拷問によって「我が」(我らの) 肉体が毀損されず、また汝の加えた最も厳しい苦痛を我らが感じていないことを見ている。「ではないか」。汝の力の何と空しいことよ。ところで「至上の」(万能の) 神は、誰によって作られたものでもないが、万事をなしとげたまうた。しかし汝が拝む汝の青銅の神は、人によって作られ、何事もなし得ず、またなしとげたこともない。そこでラディチウスは聖キプリアヌスに言った。キプリアヌスよ、その若さで汝は、汝自からについて愁みをもたぬか。聖キプリアヌスは答えた。ラディチウスよ、人として最も破廉恥なるものよ、何故に汝は(汝を作った) 汝の神を信ぜずして試みるのか。

9、ラディチウスはこれを聞いて、竈に、焰がもえあがるのが六十クピトゥスの距離まで見えるように、麻屑と油とを入れて、火をつけるように命じた。これはあたかも「かつて」バビロニアにおいて、神の少年たち、デイドラック、ミサックおよびアブデネンゴを焼きつくさん<sup>(2)</sup>がために、カルデア人がなした如くである。こうしてラディチウスは竈の激しい焰を見ながら、神の両聖者を彼のもとに曳き来るように命じ、そして聖サヴィヌスに言った。ディオニソスの神に犠牲をささげよ。さらに彼はふたたびサヴィヌスに言った。サヴィヌスよ、汝は精神については片意地な、心においては酷薄な態度をとってきたが、そのまま「この火焰の中で」耐えるがよい。見るとおりに、汝には懲罰が用意されているが、このなかで汝は、我らの神ディオニソスの大いなる報復を身をもって思いしるがよい。

(p. 386)

(1) 《cubitus》 臂。臂関節から中指の先までの長さ。古代ローマの1クピトゥスは約41.75 cm。六十クピトゥスははたがって26 m. 505 にあたると。 Cf. H. DOURSTHER, *Dictionnaire universel des poids et mesures anciens et modernes*, Anvers, 1840, réimp., 1965, p. 115, v° 《coudeée》.

〔第二章 崩壊した偽りの神。新たな拷問によって空しくも試された両殉教者のゆるぎなき信仰。〕

## 読誦三

ついでプロコンスルは（聖キプリアヌスの方に）向きなおって言った。若者よ、我が意向に従って意を安ぜよ。そして我が王国において我につぐものとなれ。聖キプリアヌスは答えた。我らはすでに「たしかに」汝に言ったが、我らは決して聾で、「そして」啞の（愚かしい）汝の神々に犠牲をささげることとはせぬであろう。（と言うのは）もし我らが汝の神々に犠牲をささげたならば、神の定めたまいしところによって我らに与えられ、これらをもって我らが天にて生きねばならぬ魂を、ことごとく捨て去ることにならう（からである）。よって我らは汝の王国から、手をつくして遠ざかることを、むしろ進んで求めるものである。何となれば王国は死すべき「もの」であり、（また）汝の神々と等しく滅ぶであろうからである。とあれ永遠に死ぬものは何であれ、確実に破滅し移ろっている。さらに聖サヴィヌスは、彼の弟の祈りに伴われて、プロコンスルに言った。プロコンスルよ、汝が神であるというものは、神ではなく、手で作られた彫像であることを、肝に銘じて「思い知るがよい」（思い知る気はないか）。ラディチウスは言った。彫像は呪われたものではなく（有益であり）、また偶像は、人の手によってではなく、神の力によって造られたものである。すなわち力は、そのなかに宿り、我らの犠牲を納め、（我らに）二つのものをもたらず。すなわち偶像は我らに助けと救済とを分かち与えたのである。

11、聖サヴィヌスは答えた。では汝は我々が「行って」（上って行って）犠牲をささげ、「その結果」（そして）我々の犠牲によって、汝の神ディオニソスの力のすべてがあまねく示されることを欲するのか。ラディチウスは答えた。我は汝らが、崇めかつ犠牲をささげ、そしてディオニソスの「大いなる」力を「認める」（知る）ことを欲する。§ そこで「神

の両聖者) (聖サヴィヌスと彼の弟キプリアヌスと) は、そこに偶像がある神殿に入り、「それによって」悪魔が縛られる(が故に) 聖十字架の印をもって身を護りかつ武装して言った。全能の「神よ、(主よ) 汝はすべてを抑えつつ果したまい、果しつつ「抑えたまう」。また汝はすべてを統べたまいつつも、その場所にとらわれたまうことはない。汝は悪魔を汝の真理から遠ざけたまい、永遠の火のもえる深淵に「繋ぎたまうた」(退けたまうた)<sup>1)</sup>。また汝の権力の大きさ「を懼れる」(に畏こむ) 聖天使たちを、彼らが如何にしても何事かにつまづくことがあり得ないように、汝の光の永遠の輝きによって支えたまうた。汝はバビロニアにおいて、ベルの偶像の瞞着を、ダニエルの賢明さをもって、「虚飾をはぎとつて」(真理を明らかにして) 暴露したまうた(暴きたまうた)<sup>2)</sup>。汝は王の夢を同じくダニエルをもって、寓意によって解明かしたまうた。<sup>3)</sup> 汝はファラオの盲目的な怒りを海の深みに沈めたまうた。<sup>4)</sup> 汝は汝の僕モーセの祈るを聞きとどけたまうて、汝の意志の徴し「である」(として)、杖をもって、磐から泉を「湧かせ」(流し) たまうた。<sup>5)</sup>

(1) 黙示録、第二〇章、2。

(2) *Ulgata, Prophetia Danielis, XIV, 1-21.*

(3) ダニエル書、第四章、4~27。

(4) 出エジプト記、第十四章。

(5) 出エジプト記、第十七章、1~7。

12、汝は今いまし、汝はかつていました。そして汝は最後の審判に來りたまうであろうことを、信じまつる。永遠の王よ、我らは汝に、祈願をききいれたまうて我らを助けに來りたまえ、汝の真理を嘘言と断ずるものたちに、正義の光を示したまえと祈りまつる。これ彼らが汝の真理を認め、かつ汝がいますし、永遠に生きたまい、絶えず何処にてもいますことを知らんがためである。(また) 汝の御子、我らの主イエス・キリストを通じて、人々がこの偶像のうちに保ち続けている闇の罪を拭い去り、「かつ一掃したまえ」(排除し、打まかしたまえ)。

13、そして彼らはこれらのことを言うと、偶像の方に向きなおり、大声で叫んだ。無益で、盲目で、空虚で、啞で、髯のディオニソスよ、我々は、高きにましまして、また何処をも統べたまうキリストの大きいなる、また(最も)栄光ある御名によりて、汝に誓う。すなわち汝が、そこに宿るかに見える神座から、汝が崩れておちて、地面に打ちたおされんことを。このことにより人々が、「如何にまた如何程」(如何ほどにまた如何様に)汝には「匿された」罪悪が存するかを認めんがためである。たちまちにして地震がおこり、「バックス、すなわちディオニソスの父リーベルの」(バックスの父の子、すなわちディオニソスの)誉れのために彫刻された偶像は陥ちた。かくて偶像は塵に帰したので、いあわせたものすべては、「不」信「の」徒こそ逃げうせたが、「肝をつぶして」(痛恨にうちひしがれて)、これが何で出来ていたかを知って驚いた。この時聖サヴィヌスはラディチウスに言った。見よ「汝の」偶像を。この偶像は、神によって創られた「心清らかに」(と純粹に信じて)生きることを当然求めている人々を、不信(の裡)に陥れていた。これは土より成「るが故に」(り)地に陥ちたのである。いざ下り来ってこの像の塵を集めよ。「汝は」さなくばただちに、如何にこれまで汝が冥い無知に陥っていたかを思い知るであらう。

(1) B <Idolum, quod erat sculptum in honorem Liberi patris Bacchi, id est Dionysii. P <Idolum, quod erat sculptum in honore Liberi Patris Bacchi, id est Dionysii>. 言ひまでもなくリーベルは、バックス、ディオニソスと同一神である。したがってBの読みは明らかに誤りで、liberiのlを小文字にしているPの読みを採るべきであらう。しかしPは、大文字小文字を必ずしも明確に使わけておらず、わけても人名・地名の冒頭には、小文字を使う場合が多い。

14、しかしてラディチウスは、こなごなに砕かれたディオニソスの像の故にいたく悲しみ、準備されていた火のもえさかる竈の中に彼らを入れるように命じた。そして聖サヴィヌスと(彼の)弟「聖」キプリアヌスとが火のもえさかる竈の中に入った際に、彼らの間に第三の人が見え、その顔容は太陽の輝きを放ち、それ自体の明るさによって、焰の「明るさ」(輝き)を、ことごとく昏くしていた。こうして彼らは竈の真中に、草の中で花さけるが如くに置かれ、口をそろえ

て「言った」(祈った)。我らの父、主なる神よ、我ら汝に感謝をささげまつる。(すべては汝に服し) 汝は我らが想起するにふさわしくいます。(すべての被造物と首天使たちの軍の神は祝されてありたまう。汝は竈に送られたかの少年たちに第四のものとして語りかけたまいし如く、同じく我ら二人をも第三のものとして助けたまい、また汝の慫みの業を我らに注ぎこみたまう。物質の焔をば我らから退けたまえ。聖霊の燃えさかる灼熱の焔をば、我らの裡にて熱しかつ注ぎこみたまえ。)<sup>1</sup> これすなわちプロコンスルが、(人の) 手にて造られるものが神々にあらざること、また汝が火のもえさかる竈から我らを取り出す力がありたまうことを「思い知り」(認め)、またいあわすものどもが、汝が天にましまして、世を通じて続けたまう眞の神にいますことを知らんがためである。

(1) この部分はPにのみ存在する。此処にその解説を記す。

《Benedictus est Deus omnis creaturae et militiae archangelorum, qui sicut quibus pueris in fornacem missis quartus affaisti, ita nobis duobus tertius assistas (sic) et nobis rem tuae pietatis infundas. Disperge a nobis flammam materialis (sic), incendii et infunde in nobis ardentem et incendentes flammam spiritus sancti,...》

§ 15, § 彼らがこれらのことを述べ「ると同時に」(たので)、竈の焔はたちまち外にあふれ出して、プロコンスル・ラディチウスと、彼とともにいあわせた約(百)六十人ばかりの不信の徒とをとらえ、彼らの身体が一切再現されぬまでに、ことごとく焼きつくした。これは神の怒りが彼らを滅ぼしつくしたからである。このことがなされるや、これをとりまいていたすべての人々は恐慌に陥った。そして神の両聖者が、彼らの「着衣」(衣服)に火の匂いが移らぬ程に無傷で竈から出て来たのを見て、揃って神を讚美しかつ崇めて言った。今や我々は、聖サヴィヌスと彼の弟キブリアヌスとが述べ伝える「神」(もの)が偉大であることを知る。彼は兩人を火のもえさかる竈から取り出した。しかししてプリンケプスの「テラリウス」(テラシウス)なるものは、怒りの火を点ぜられて、彼らを牢獄に「もどすように」(とじこめるよう

に)命じた。

16、さて二十六日の後に、その名をマクシムスと言うプロコンスルが来て、両聖者の祈りによってもたらされた焔から免れた(プロコンスル・)ラディチウスの兵士たちから聞いて、プロコンスル・ラディチウスの破滅を知り、いたく憤った。そして翌日彼は、両聖者を滅ぼさんがために、彼の兵士たちと集会を開いた。ところで(神の)両聖者は、神を(称えかつ)崇め(「かつ称え)つつ、牢獄にとじこめられていたのである。ついでその到着から三日後に、プロコンスル・マクシムスは、彼らを滅ぼすべく赴いた。彼はフォルスと呼ばれる場所にある裁判官席にすわって、彼の前に神の両聖者を出頭させるように命じた。そしてプロコンスルは「聖(至福の)サヴィヌスに言った。汝、年の数においても、身体の外観においてもより長じたるものよ、汝は如何なる名で登録されているかを私に申し述べよ。事実聖サヴィヌスは丈高く、外観は恐ろしげで、容貌には魅力があり、極めて精力的で、身体は調和がとれ、心は至福にみたされていた。

17、聖サヴィヌスは答えた。もし汝が我が名と我自身とを知ることを欲するならば、まず、名をマグヌスという(我が)父と我が母タキアとが我を生んだ時に、サヴィヌスと呼んだことを、また我はかくして彼ら自らにより教育されて大きくなり、「かく)養われたことを、またまさしく揺り籠から、我は「最愛の)(へり下った)息子として聖書を教えこまれたことを知れ。ついでマクシムスは聖キプリアヌスに言った。そして汝は、如何なる名で呼ばれているか。「彼は)(聖キプリアヌスは)答えた。キプリアヌスと呼ばれている。我らはまさに同じ父と同じ母から生れた兄弟である。プロコンスルはこれらを聞いて言った。汝らは生れてこのかた(これまで)、如何なる生き方をしていたと言ったのか。聖キプリアヌスは「言った)(答えた)。すでに汝に言った如くに、(我らの)父マグヌスは、三度コンスルとなり、尊く「高貴な)(偉大な)ブレッシアの町の長官の地位においてコンスル職を務めあげた。しかして我らの母は、彼女の母ロガディ

アによって、同等のコンスル「家系」に生まれついた。これらに対してマクスムスは言った。さすれば汝らは名門の流れに属する兄弟であるが故に、「汝ら注意せよ」(我は配慮する)。そうは言うものの、もし汝らがアポロの神を崇めぬならば、汝らは二人ともさまざまな懲罰や拷問によって罰せらるべきである。では汝らを野獣どもが喰いつくすにまかせるとしよう。

読誦四

18、そこで聖サヴィヌスは彼に言った。我らは汝の脅迫を怖れない。プロコンスルはふたたび彼らに言った。汝らは大いなるディオニソスの神を破壊することを「何故に」(かくも)怖れなかったのか。すなわち汝らはディオニソスの神の偶像を破壊し、またその上に供儀の習慣を空しくした。聖サヴィヌスは答えた。我らはディオニソスの偶像を破壊したことなく、皇帝の友であるプロコンスルを火で焼きつくしたことなく、「さらに」また偶像への供儀を空しくしたこともない。しかしながらキリストは、彼の聖者たちによって勝利を取めたまうから、彼が我らを火のもえさかる竈から無傷で取出したまい、彼の僕らの祈りを通じて、真理の敵どもを無に帰したまうたのである。プロコンスルはふたたび(くりかえし)猫なで声でサヴィヌスを懐柔しにかかった。曰く。サヴィヌスよ、汝は何故に、すべてを養いたまうアポロを崇めぬのか。「汝が生きていられるように、我は汝に奨める」(アポロが天から汝を生かしたまわんことを)。「聖」サヴィヌスは答えた。そして「汝」マクスムスよ、(汝は何故に汝の主を信じかつ崇めぬのか。)彼は四日目に太陽と月とを創りたまい、また汝を造りたまうた。そこでマクスムスはキプリアヌスに言った。何と若者よ、汝は汝の気狂い沙汰を忘れよ。そして汝がもっともひどく拷問をうけて非業の死をとげぬように、アポロの神に犠牲を捧げに赴け。聖キプリアヌスは答えた。しかしながらもし我が神の恵みと保護とを忘れ去ったとすれば、我は悪を犯し、神々ならざるものに就くこととなる。ついで聖サヴィヌスが言った。何と不信の徒よ。汝は彼がより年若い、「と汝が認める」が故に、汝は彼をこの故にこそ誘惑せんと欲するのか。我は汝に、彼に代って断言する。我が弟は汝の「主を」(神を)、まず我が崇めるにあらざれ



ば、崇めることをしないであらう。乱心するな、マクシムスよ、「そして」古えのコンスルたちの悪意「を思いおこそうと」(と競わんと)するな。

(1) この部分はPのみにある。〈quare non credis et adoras dominum tuum,……〉

(p. 389)

19、プロコンスルは言った。そして汝は汝の魔法の技に信頼をおこうと欲することなく、古えの識者の例しに倣い、甘んじてアポロの神に犠牲をささげよ。聖サヴィヌスは言った。プロコンスルよ、自分から動くこともかなわず、感じることも「ない」(かなわぬ)ものを崇めることを、我らに対して命ずるとは、汝は悪魔の技によって一層乱心したのではないか。ラディチウスの浄められざる心や、憤怒のあまり我を忘れたその極度に残忍な心を引きあいに出さぬがよい。しかして汝が我らの上に「それが」豊富に加えられたことを知ればこそ、神の「完徳」(保護)に心を向けよ。また、汝が火焰によって滅ぼされたと「知った」(聞いた)ものどもが蒙った懲罰から逃れるがよい。そして今後は、汝がこの世を去る時に、責苦によって汝の悪が罰せられざるように注意せよ。だがマクシムスはこれらのことを聞いて、ふたたび「怒りに」(逆上に)我を忘れて、彼らを車輪の上に引のばして、縛りつけるように命じた。これすなわち車輪が(彼らとともに)まわされるや否や、彼らの身体が引裂かれんがためである。しかして車輪の上に引きのばされた聖サヴィヌスは言った。主よ、汝の愛は如何に快きかな。汝はまた人々の邪悪な心を拒みたまわずに、ただちにそのまま受容れたまう。汝の愍みは限りな「きものとなれ」(くあれ)。これすなわち、我らが耐えしのぶ、肉に加えられる車輪の責苦を通じて、我らが我らの魂の救いに到るに価するものとなり、また我らの褒賞が、天にて汝の前に藏められんがためである。

20、そこで彼はプロコンスルに言った。急げ、プロコンスルよ。このことよって我らを、我らにとつては何時なりとも望ましい、殉教の勝利へと導け。汝の父悪魔の意志を貫け。我らにとりて生きるはキリストであるから、従つて彼を証

しつづつ死ぬのは益である。<sup>(1)</sup>しかし刑吏たちは、車輪をまわしながら、両聖者の四肢がばらばらになる筈だと思っていた。  
 § ところが彼らが想像したような両聖者の四肢の苦痛は、殆んど激しいものにはならなかった。§ 聖サヴィヌスはそこで、依然として闘いの裡にありながら、主にむかって言った。全能のキリストよ、内気な心を認めたまうものよ、助けをもたらしたまうものよ、そして解放者よ、また我らの救い主よ、我ら汝に感謝をささげまつり、また十字架に繋がれたる我らを「十字架から」受入れたまわんことを祈りまつる。悪魔に対して闘うべきゆるぎなき信仰を我らに与えたまえ。汝は健全なる心を知りたまう唯一の神にてましませば、我らのうちに「プロコンスルの」(コンスルの)穢れたる心が力を及ぼさざらしめたまえ。汝の名は、汝を怖れたるものにとり偉大にてあれば。彼らが「これらを」(これを)言った時に、車輪はその場でばらばらになり、神の聖者たちもまた同時に、傷一つ負わずに解放された。

(1) ピリピ書、第一章、21。

「第三章 牢獄からの解放。ガリアへの出発。死者の生命が帰って来たこと。光をとりもどした盲人たち。

数多の人々の改宗。殉教。」

読誦五

しかしして数多の人々は、彼らがかかる殉教に耐える勇氣を歎賞し、かつキリストを讃め称えたので、プロコンスル・マクシムスは(誰も)彼らを打ちまかし得ぬこと「について」(を)ひどく悲しみ、自分こそが「彼らから」(完膚なきまでに)打ちまかされたと「考えて」(考えたが、とにかく)彼らを牢獄にとじこめるように命じた。そしてついに三日後には、彼は彼らに牢獄から姿をあらわすように命じ、そして野獣が寝そべっている円戯場に出場させるように定めた。しかも牝獅子は驚くべき大きさがあり、円戯場内では、隔離して檻にとじこめられていた。また別に隔離して二頭の牡獅子がおり、これらは三日(三)晩の間餌なしで飼われるように命令が出されていた。これすなわち獣たちが神の両聖者を、飢え

にかりたてられて、「より」すみやかに喰いつくさんがためである。しかして両聖者が円戯場の前に連れて行かれると、マクシムスは、アンフィポリスの町の門にある裁判官席に座って、この町のすべての人々の前で彼らが円戯場に入るように命令を下した。両聖者は心静かに、顔容明るく、「大いに急いで」（心がいたく急ぐままに）、傷一つ受けずに、さらに棕櫚の枝を求め、「に行くものとして」（て急ぐものとして）、円戯場に入ったのである。

22、そこでプロコンスルは言った。汝らはあの男たちが「如何に」喜ばしげな顔つきで死にむかって急いでいる「か」（こと）がわからぬか。よって居あわせた他のすべてのものたちは、そのことを歎賞した。かくして野獣の追い手である二人の司は、静粛を命じた上で、神の聖者たちを喰いつくすように、まず牝獅子を放った。牝獅子は放たれるや、勢い強く怒号して、あまりの飢えに錯乱し（きつ）て、待ちのぞんでいた餌食をとらえ「んと」（るように）、大跳躍をして「檻から出た」（檻を離れた）。しかし神の両聖者を見つけると、すっかり癡猛さをなくし、（サヴィヌスとその弟キプリアヌス）両聖者の足もとに身をなげて、飢えから来る怒りを残らずして、やさしく尻尾をふって歓びを示した。さらにそれに加えて、殆んど（およそ）一時間の間、両聖者の足の汗を舐めあげることがやめなかった。しかして獅子の司たちは、牝獅子（p.390）が彼らに金輪際飛びかかろうと「しない」（しなかった）のを見て、牝獅子に続いて、同様に三日間餌を与えられず、飢えていらだっている二頭の牡獅子を放ったが、しかしこれらも牝羊よりもおとなしく地面に横たわって、牝獅子がやったように、両聖者の足の汗を舐めることをやめなかった。（p.188）

23、よって野獣の司たちは、彼らが牝獅子によっても、牡獅子によっても、まったく傷つけられなかったことを知って、これらの獅子を、これらがその囲いの中に「もどる」（集まる）気になるように、呼びもどしにかかった。一方両聖者から言葉をかけられていた獅子どもは、また同時に「憩っていたが」（黙っていたが）、追い手の声で、依然として餓え

てはいたが、それらの「檻に」(寝むらに)戻って行った。このことを仔細に見て、立会っていた大勢の観衆は、群衆の慣いとして逆上し、声を揃えて「叫んだ」(呼びかけた)。曰く。もしこれらの悪ものどもにして魔術使で、野獣に魔法をかけたものどもが、殺されないで済むならば、単にあまねく世界が拝んでいる神々のみならず、さらに我らの属州までが破滅することになる。また彼らはプロコンスルに言った。あらためて彼らを牢獄に「とじこめる」(送る)ように命ぜよ。そして彼らは、そこで餓死するにいたるまで、ずっと(とじこめられたままで)崇められるがよい。かくてプロコンスルは彼らをふたたび牢獄に送るように命じ、石工たちには牢獄の入口を、溶けない「石灰」(膠)で閉じてしまうように指示した。彼らは命令を「受けると」(やりとげると)、両聖者を牢獄にとじこめて、入口を「柵で」(材料で)ふさいだ。こうして両聖者は三日と三晩の間俗世の食物をとらなかつたが、しかし聖霊の養分によって力づけられ「ていた」。(て、一人揃って主に)牢獄の中で「神を祈り求めていた彼らに」(祈っていた彼らに)たちまち天使があらわれて、彼らを勇気づけながら言った。汝ら心を煩わすことなく牢獄から出でよ。「そして」相たずさえてガリアの地方へ赴け。そこで汝らは、汝らに価する永遠の休息「の歓びを」(という栄冠を)、主から「受けるであろう」。(得るであろう。)するとすなわち立ちどころに壁が左と右に分れ、出ようとする両聖者に途を拓いた。

§ 24、§ こうして「聖」サヴィヌスと(彼の弟)「聖」キプリアヌスとは、六月の朔日の朝まだきに、天使の指示と約束とによって牢獄から出て、二人の司祭(すなわち)アスクレピウスとヴァレリウス「の如き」も呼びよせられて、ガリアの地方に向った。「しかして」彼らは上記二司祭を従えていたが、これは長途の旅はもとより、さらに「彼らの」殉教に倣わせんがためではなかつた。かくて彼らはアルベス・ペンシーナエの彼方まで来たが、ローヌの急流の畔りで、旅人の慣いとして、休息のために揃って腰を下した。ところが、彼らの力や奇蹟についての噂の多くが神の聖者たち「を追越して」(に先行して)いたので、部落や、村や、町や、その領域から、彼らを求めて会うために、人々の「度をこえた」(異

常な) 大群が、いたるところから「絶えず」(彼らのもとに) 馳せ参じた。其処で起ったことは、次のとおりである。すなわちその名を「エミクセニア」(エンモニア) というある婦人は、それまでは異教徒であったが、少し前に彼女の一人息子が、死にとりつかれてこの世を去った。彼女は、ローヌ河の岸で、群衆にまぎれこんで、聖者たちが身体を恢復させるために座っていた場所で彼らに会った。そして彼女は聖者たちの「足もとに」(膝もとに) 身をなげ出して、はげしく泣きながら叫びかつ言いはじめた。我らは汝らがいと高き神の友たらんとするものであり、また汝らの祈りによって、神の許で多くのことが成就したことを知っている。我は願う、「我ら」(汝ら) 我が希望である我が一人子のために「祈りまつらん」(祈りたまわんことを)。(また) 汝らの祈りによって、我にこの子を「返したまえ」(取戻したまえ)。「さすれば」汝らの神に、この子と我が身とを献げまつるであらう。他の人々の多数も地にひれ伏して、聖者たちがこの婦人の涙に慙れみをもつように、「辞を低くして」(期待した)「懇願した」。

(p. 391)  
§  
25、そこで至聖のサヴィヌスは、極めて優しい婦人(たち)と群衆との涙とに動かされて、人々に、心をつくして主「イエス」(キリスト)を探し求めるようにと言葉をかけ、地にひれ伏して暫しの間祈って言った。汝「至上の」(全能の) 神よ、汝は天と地とを汝の全能によって定めたまうた。「また」(汝は) 天を特に星辰をもって「飾り」(粧い) たまい、また地を汝の御名の「讚美と」栄光とのために、人々をもって「粧い」(飾り) たまうた。我は汝の限りなき慈悲を乞いまつる。この死者を甦らせたまえ。「また」(これは) 汝のこの奇蹟によって、この属州においては、「誤りにみちた占いの導きでいそぐ」(罪悪という迂路を通っていそぐ) 多くの人々が、汝のもとに「つけ加えられるであらう」(集められんが為である)。§ これらのことを言いながら彼は立上り、そして死者の顔とむかいあい、彼の右手をとって彼を立上げらせ、生きかえった一人息子の少年を、その母に返した。彼女はその場で少年とともに洗礼を受け、約束した如くに、至福の信心「と大いなる心の備えとをもって」(をもつて、母は) 主イエスに従った。主はさらに、多くの恩寵をその僕た

ちにもたらしたまうた。すなわち「いあわせたまもの」(集って来たもの)すべての見ている前で、彼らの祈りにより、三人の生れつきの盲人がそこで光を与えられ、また二人の跛者が立上られるようになったのである。

26、こうして彼らはこれらのことを、主の同意の下に行なったのであるが、彼らは天使を通じて与えられた主の命令によって「命ぜられ、かつ」告げられたことから長時間遅れないために、旅を続け、リヨンの傍「を通って」(でソーヌ河を泳いで渡り)、ついにはブルグンディア「の」(という)最果てをへめぐって、オーセールの町にたどり着いた。これはひとえに(この町の)至聖のゲルマヌス司教を訪問せんと欲したためである。すなわちこの時に、この町には、最も誉れある司教ゲルマヌス<sup>1)</sup>がいたが、彼はトロアの司教ループス<sup>2)</sup>とともに、アイルランドからこのころ帰って来ていた。アイルランドは、スコット人の大洋をこえたところ、すなわちブリトン人の島の彼方にあり、そこにこの司教はペラギウスの異端者の不信を抑圧すべく、ローマの至高の使徒の座から差遣わされたのであった。従って神の摂理によって両聖者は、羈旅の半ばに對面することを求めた「正にその時に」(正にその人に)、「彼らがラディチウスに対して耐えた」彼らの迫害に對する闘いを残らず(彼に)報告したのである。司教は、彼らが主に約束したてまつたごとく、立てた誓願を貫徹するように彼らを力づけ「たが」(ながらも)、至福のサヴィヌスを彼のもとに留めることを欲した。司教は彼をそのように説得し得なかつたので、その弟キプリアヌスに、彼とともに留まるようにと懇願した。

(1) オーセール司教。聖ゲルマヌスは、四四八年または四四九年に歿した。彼については、ローマ殉教録(Martyrologium Romanum)七月三十一日の項にある(原注)。本稿緒論を参照せよ(訳注)。

(2) 聖ループス(S. Lupus, saint Loups)については、ローマ殉教録に従って、同月一九日に扱ひ得るであろう(原注)。*AA SS., Julii, t. V, pp. 69-79.* 四七九年以後の七月二十九日歿。cf. MOLINIER, *Les Sources*, t. I, p. 54, n° 193. (訳注)。

27、しかしながら聖サヴィヌスは、人でしかないものの命令に対してよりは、むしろ主の命令に喜んで服するものとなるうと心がけていたので、主から天使を通じて示された如くに、ガリアの地方に向うことを、親しく聖ゲルマヌスに明かした。そこで聖ゲルマヌスは、彼らの意志に従って、ほとんど三千歩の間を彼らとともに進み、「そして彼らを、彼の至福の」(そこで彼らを彼の特別の) 祝福をもって「聖化して」(強めて)「帰って来た」(歩をかえした)。さらに彼らはそれぞれ、至福のゲルマヌスを通じて、信仰において堅固にされ、祝福によって鞏固にされ、「さらに聖靈に満たされて」、彼らが始めた「旅を」(ことを) 貫ぬいた。そしてロワールの河を渡って、彼らはトゥールの都市領域の対岸の地域に到達したのである。

(1) 《*tria fere miliaria*》, Albert BLAISE, *Dictionnaire latin-français des auteurs chrétiens*, Turnhout, 1954, v° *milliarium*: mille, un espace de mille pas. 一マイル。すなわち千歩。1 pas は各地で非常なちがいがあがるが、フランスの 1 pas géométrique=2 pas ordinaires=1<sup>m</sup> 62420; le pas ordinaire=2<sup>1</sup>/<sub>2</sub> pieds=0<sup>m</sup> 81210. 古代のローマの passus=1<sup>m</sup> 47250. 《約三千歩》とは従って、ほぼ 4 km. にあたると。H. DOURSTHER, *Dictionnaire universel des poids et mesures*, v° 《pas》.

§ 28, § その頃まことに不幸なプロコンスル・マクシムスは、彼ら両聖者が驚くべきことに牢獄から抜出したこと、また拡がっている噂によれば、彼らがガリアの地方に赴こうとしていたことを発見した。またさらに彼の神ディオニソスの失墜を思いおこし、また「喰い入るような」(心中) 悲痛感にうたれていたが、すなわち彼の父方の親族である「プロコンスル」(コンスル)・ラディチウスの「消滅」(焼死) に関して、彼の神々の忌むべき稜威にかけて、彼らを「裁くであろうことを」(捕えるべきことを)、また「アンフィポリスの」(アウソニアの) 一帯には、まず神の両聖者が彼自からの手で斬首の刑に処せられない限りは、決して帰って来ないであろうことを約束した。こうして彼は二百人の武装兵とともに、そこに(両聖者が) 歓待をうけに立まわったところは、如何なる場所でも探しまわって、「彼らを」追った。ところが

「上記」二兄弟は、「かの」司祭たちとともに、すでにポワチエの領域に、すなわちそこでガルトンプの河が「クルーズの」河に流れこむ、コンフリュアン<sup>(1)</sup>と呼ばれる場所に到達していた。実はこの場所は、「今では」(かつては) エクスウェンティウムと名づけられているが、(そこで) 彼らは、「如何にも」長い(旅の) 疲れに倦み、(よって) この河の合流点から遠からぬ、ただの千歩のところまで休んでいた。

(1) Confluentes, 俗に Confouens, Confans°. ガリア辺境厲州の、ポワチエのリーメスのヴィエンヌ河沿いの小村。あるいは LABBE, *Bibliothecae Mss.* t. II, p. 665. に「これ」 Brosa 河にネンロシユポゼイ (Rochepezay, La Roche-Posay) (原注)° Confluent. 地図上には地名として記載されているが、行政区画名ではない。クルーズ河にネンロシユポゼイの東南、ガルトンプ河の対岸にあたる (訳注)。

29、「第三の河はアングラン」<sup>(2)</sup>と呼ばれ、より上流でガルトンプに「流れこんでいたが」、聖者たちは、(その時) 彼らがそこで安らぎに身をゆだねていた上記の場所から、彼らを追って来たプロコンスル・マクシムスが、その二百人のイタリア人従士をひきつれて、「その河まで」やって来たのを見た。§ しかも、聖サヴィヌスと彼の弟キプリアヌスとは、彼らの敵を認めたものの、河を渡り得る「手段を求めて」(手段をもたなかったの)、ただちに「地に伏して父なる神である」(地に膝をついて) へ膝を屈して、主に祈り求めた。曰く、主イエス・キリストよ、汝はイスラエルの子らをファラオの手から解放放ちたまい、彼らを乾いた海の真中を通して導きたまうた。我らにこの河を渡るべき助けを与えたまえ。これすなわち汝が、我らをこれらの敵から逃れ得しめたまうて、汝が我らに到達すべく命じた場所<sup>(3)</sup>に我らが到達せんがためである。しかし彼らがこれらを「非常に激しく」(非常にすばやく) 述べた時に、祈りから立上ると、(はやくも神の賜物があり) 新しい船が彼らの面前の河岸に現われた。そこで彼らは神に感謝をささげ、急ぎ行ってその船に乗りこみ、イタリア人を尻目に、船頭も漕ぎ手もなく、無事に対岸にたどり着いた。



(1) Inqla. 俗に 'Anglin. (原注)。

(2) 《Hexis genibus》. B (AASS, p. 189 A) 欄外に付された異読にのみこの読みがある。

(3) 出エジプト記 一四章 22。

30、ところでプロコンスル・マクシムスと、(彼らとともにやって来たものどもは、神の両聖者が河を渡った対岸でのぼれそうな小途をよじのぼっているのを見て殺到したが、狂気に陥り、我と我が身を渦に投じ、その半数はたちまちのうちに正しくこの神の裁きにあつて、河中に没した。ところでマクシムスと)彼とともにいたものどもとは、泳いで危険から脱したが、神の聖者たちをより速やかに追いつめて、「五月二五日に」(六月二四日に)ガルトンプ河の畔りの、古老がキレスクスという名を宛てていた場所、というよりは村において彼らをとらえた。この村はアンティニイの村、というよりは単なる集落から千歩のところにある。そして彼らは捕縛した両聖者を、「ペレリス」(ペレレス)と呼ばれる地所にむかいあう、この河の中の一つの島に曳いて行き、そこでさまざまな責苦によつて両聖者を衰弱させたのであつた。ところで両聖者が責苦をうけている間に起つたことは次の如くである。あるものが悪しき靈に入りこまれて、悪魔憑きとなり、狂乱状態に陥っていた。そこでマクシムスは聖サヴィヌスに言った。サヴィヌスよ、汝何故にアウソニアでは用いた力を、この男にとりつき、彼を残忍に「引裂いている」(さいなんでいる)悪魔を追い出すためには、「汝のイエス」(十字架につけられた)キリストの名において用いぬのか。そこで聖(至福の)サヴィヌスは、両眼を「少し」(一瞬)天にむけて言った。十字架につけられたまいしキリストよ、我は汝を宣べ伝え、また宣べ伝え来りしものであり、さらに汝を忠実に崇め、また崇め来りしものであり、さらに汝に会いまつらんことを望むものであり、さらに汝の名のために死するを拒ぶものである。穢れし靈よ、我はこの名において汝に命ず。神の姿に似せて作られたこの人より出でよ。そしてこれ以上この人に入らんとせぬがよい。たちまち悪しき靈は出で、癒された人と、さらに悪臭によつてはなはだしく穢された場

所とを後に残した。彼はその場で洗礼を受け、穢れなきものとして去った。

(1) この部分はPのみにある。↳...et qui cum illo advenerant, videntes Sanctos Dei in alteram trans flumen ripam, frantem per viam scandere, concinantes, amentia furbundi immererunt se per ipsos gurgitibus, quorum media pars in eodem celerius dei iudicio persequentes, flumine interit. Maximus vero...」

(2) Antinacum, Antigny (Viene), ar. Montmorillon, c. Saint-Savin. サン・サヴァンの南南西約三軒(訳注)。

(3) ラップの言うところによれば、これは今日の Seaux で、サン・サヴァンとアンティニの両村の間にある(原注)。訳者はこの地名を発見し得なかった(訳注)。

31、ところでマクシムスの(百人の)従士(のうちの十人)は「これを見て」、その場で最もあからさまな誓願を立てて信仰に入り、父と子と聖霊との御名によって洗礼を授けられるようにとうやうやしく万人の前で「聖」(至福の)サヴィヌスに懇願した。よって「聖」(至福の)サヴィヌスは、彼らに洗礼を授けようと「した際に」(するや否や)、マクシムス長官によって「七月一日に」斬首の刑に処せられ、洗礼を授けられるように願ったかの十人の男たちもまた、彼らの「戦友たち」(兵士たち)によって、同時に斬首された。聖三位一体の名において忠実に贖罪の受洗を求めた彼らが、自からの血によって洗礼を授けられた「か否かについては」(ものであることには)疑問の余地がない。そこで残りのものは聖キプリアヌスと二人の司祭アスケレピウスとヴァレリウスとを導いて、彼らを、河を渡ってアンティニと呼ばれる集落に曳いて行った。しかしながら二人の司祭、すなわちアスケレピウスとヴァレリウスとは、その夜彼らの手から逃れて、夜のうちに「聖」(至福の)殉教者サヴィヌスの遺体のもとに來り、そしてこれを、それが横たわっていた「プロセルリス」(ペセルリス)の村の向いの島から、三本の糸杉と名づけられた丘に移した<sup>1</sup>。そこにはかつて平和な時に、殉教者聖ヴァンサンの誉れのために建設された教会堂があったが、しかしこれは「すでに」(さらに)ヴァンダル人の迫害の際に荒廃した状態となっていた。「聖」(殉教者)サヴィヌスの「栄光にみちみちた」(聖にして栄光ある)遺体は、(七月一日

に)かくてここに葬られたのである。

(一) Tres-Cypressi, Mont des Trois-Cypres. ランで讀むところでは、サン・サヴァンの村から少し離れた今日の Mont Saint Savin (原注)。

32、さらに至福のキブリアヌスは、さまざまな責苦と手のこんだ拷問とをうけながら捕えられていたが、上記アンテナイの村、もしくは集落において、極刑の宣告を受け、七月一四日に人たるを止め、かくて勝利者かつ殉教者としてキリストの許に移った。彼が喜ばしい棕櫚の枝に立到ったのはマルティヌス皇帝の時であるが、この皇帝はかのプロコンスルをキリスト教徒の迫害のために、太陽の沈む地方に差しむけた。彼はよってたちまち(彼の生命を魂とともにうばわれるという)神の懲罰をうけ(た)、(相応しくも)生命を魂とともに失なった。レオ大帝が統治において彼をついだが、しかもかのプロコンスル・マクシムスと、彼の軍隊のうちで彼とともに留まったものは、(誰であろうと)悪霊に憑かれて、あるものは河へ、あるものは林(「や」と)森(「に狂乱して身を投じ、他のものどもは自からを」(とで)、自からの武器で刺し貫いた。こうして、マクシムス自身も、ヘスペリアの地方に退いていた彼の従士団の一人といえども生残らぬという結果になったのである。そして聖サヴィヌスと彼の弟キブリアヌスとが、神の助けによって尋ね求めた場所と、彼ら自身の遺体によって、神の同意のもとに「聖なるものとした」(聖別した)場所とを、主はその名の栄光のために、今にいたるまで、彼ら「殉教者」のとりなしによって、頻々たる奇蹟をもって飾りたまうた。これらの奇蹟によって、盲人は視力を、跛者と中風病みとは歩みを、悪魔憑きは潔らかさをとりもどし、またさまざまな病氣におかされたものどもは健康を得た。「すなわち心で病むものも、さらに身体に病いをもつものも潔められたのである。」これは彼の両聖者によって栄光あらしめられたまい、「また」父と聖霊とともに、世々にわたりて限りなく生き(かつ称えられ)たまう、我らの主イエス・キリストの助けによるものである。「アーメン」。

### Ⅲ 殉教者聖サヴィヌスの奉遷の記

#### アイモイヌスの序

col. 1051

1、まこと筆者は、以下の著述の、小さくもあり大きくもある啓示を、神の、そしてキリストの卓越した証人である、聖サヴィヌスの御慈悲による賜物であると信じたものである。筆者が小なりと言うは、この書の量についてであり、さらに筆者が大なりと言うは、この殉教者の崇敬についてである。しかも読む人や聴く人の感覚に、非常な不快を与えぬためには、これらは却って簡略に記された方がよからう。筆者は、勲なき聖職者ではあるが、せめてこの聖者を誉れあらしめ、かつまた、この聖職者の下に結合している修道士たちの集いに、すなわちこの修道院の故フクベルトゥス修道院長と、彼の下で敬虔に祈りを捧げた父たちとに対して誉れを残すとともに、将来にも何ものかを残したいものである。また聖殉教者に汝らの讚美と歓喜とがささげられんがために、聖サヴィヌスと我が主ゲルマヌスとの聖性とによって、さらに汝らの祈りの慰藉によって、神と聖サヴィヌスとの友たちよ、我を助けたまわんことをひれ伏して願います。

col. 1052

トランスラテオ  
奉遷の記始まる

col. 1051

2、昔から今にいたるまで語りつがれている如くに、ヴァンダル人の却掠が、遠近の人々の間で縦横に猛威をふるって、まさにかの迫害に際して、キリストの至福の殉教者サヴィヌスの遺体があつた教会堂は破壊され、その場所は、住

むものとしてなく、荒廢するがままにゆだねられ、荒涼たる廢墟にとざされたまま、あまたの年数の流れを通じて、住めぬがままに放置されていた。仮にほんの僅か、附近の住民の誰かが残っていたとしても、彼らの手はこれを修復するにはまったく足りなかった。かくて永い時が過ぎ去ったが、しかし場所の記憶は消え去らなかつた。荒蕪地たりとはいへこの場所は、老人達の口を通じて、聖なる所、そして極めて明確に聖サヴィヌスの遺体にささげられた所と言ひひろめられていた。そしてさらに長い時間がすでに流れ去った時に、全能の神はその場所が復興され、聖者がより明らかに想ひ起されるように計らいたまうたが、如何にしてこれが起ったかを手短かに語ることは、筆者の欣快とするところである。

3、さてある日、ある百姓男の家畜が群からさまよい出たが、彼は、獸が牧場に見あたりぬので、その家畜に絶望しながら、はるかに森のはずれまでたどりついた。ところが彼はその先に家畜の足跡を見出したので、あとをつけはじめ、ついに茨や木苺が密生した荒地に、最初からとじこめられていたのを発見した。そうして、あわれな百姓たちが迷った家畜のためならば、如何に重い困苦をも克服してする如くに、彼は斧で、藪や彼を妨げる木の根のような左右の障害物を切りひらき、大汗をかきかき、急いで、彼が探し求めた四つ足が横たわっているのが見えた場所にたどりついた。彼はこの家畜を動かそうとしたが、家畜はどうしても起あがれなかつた。すなわちこの家畜は、かつてのかの聖者の教会堂の域内に入つた時に息苦しくなり、四肢のすべてが麻痺してしまつたので、かくは無力に横たわつたままで、全然起あがることも歩くことも出来なかつたのである。そこで彼はこの家畜を腕でかかえて家に連れかえり、隣人たちに起つたことを残らず、繰返し語つた。

col. 1052  
4、こうしてこの種の物語りは、日を追って發展し、さらにふんだんに尾緒がつけられた。聖者とその教会とについてはその頃まで、前に述べたごとく、いくらか噂が生き残っていたが、しかし、知っていた人々がすでに死絶えていたの

で、どの場所にあったかまでは知られていなかった。しかしながら、この教会堂のさきのたたずまいを見た人々が、当時あなたも昨日のこのように話したことどもを、かつてはしばしば聞いたことがあると、断乎として主張するものに事欠きはしなかった。

5、その間に、名前も功德もポニトゥスなるある司祭が、これらに細心の注意をはらっていたが、彼は神と聖殉教者の愛に導かれて、殉教者の教会を再建し、その場所を、今日そうある如く、住めるように恢復することに専念していた。しかして我々は、なかならず我々がほかならぬポニトゥスの甥である聖職者ボニウスから、起った一つの奇蹟を知ったことを、ここで関聯することどもにつけ加えるのが適當であると判断した。というのも、彼がほかならぬ彼の伯父から聖者について聞かされた主張することのなかで、彼は、当のポニトゥスがかつてひそかに彼から盗み去られた馬を、サヴィヌス様の取なしによつてただちに取戻し得たことを話したからである。馬がいなくなったために彼が何をしたかと言えば、彼は手綱と鞍とをもつて、それをそのまま聖者の墓の前に、文句を言ったり歎いたりしながら投出したのである。彼は言った。汝、聖なる殉教者よ、教会は汝の礼拝と崇敬との用に再建されたが、卑しい私が努力をして恢復し得たお返しに、汝は、何とも怪しからぬことに、しようとするれば出来た筈なのに、汝の功德によつて私の馬を守ることをしなかった。私は正しくこの教会に属しているが、どうしてこれに耐えられようか。神よ裁きたまえ。そして汝は熟慮せよ。もしもこのことが正しいと認められたならば、私に馬を返せ。さらにこうした多くのことを、あなたも正当に訴えるものごとくにつけ加えた後に、彼は家に帰り、夜にはながと横になって、安らかな熟睡に身をゆだねた。ついで死んだような眠りを捨てよと告げる雄鶏の声に彼は目覚めて、夜と朝の勤めを聖なる墓の前で、常の如くにうやうやししくはたした。これをおえて、彼が教会から家に帰った時に、盗まれたばかりの馬が、誰に導かれるでもなく、忽然と姿をあらわして、馴染んだ飼主の飼葉桶を求めて厩に駆け込んだ。司祭はこのことを見てどけて、主とその聖殉教者サヴィヌスとに感

謝を捧げ、以後ますます熱心に、神の殉教者の崇敬に従事した。

(一) <officium nocturnale atque matutinale...> 在俗司祭に対しては、ベネディクトゥス戒律の聖務日課が適用されていたことに  
ごうじは、L. DUCHESNE, *Origines du culte chrétien. Etude sur la liturgie latine avant Charlemagne*, Paris, 1925, p. 473.  
したがって冬期の夜課は夜の第八時(二時三〇分)の起床時におこなわれるが、夏期(復活祭から十一月一日まで)には、「日  
の出ともに行なわれるべき朝課が、その間に修道士が用をたしに行くごく僅かの間をおいて続くように行なわれる。(Regula  
*Benedicti*, c. VIII : <A Pascha autem usque ad supradictas kalendas novembris sic temperetur hora vigiliarum  
agenda : parvissimo intervallo quo fratres ad necessaria naturae exeant, mox matutini qui incipiente luce agendi  
sunt, subsequantur.>)

col. 1053

6、ところでここにその家柄において輝かしく、財産において聞こえたバイディルスなる人物がいたが、彼は宮廷付聖  
職者であり、トゥールのマルムーティエの修道院長であり、聖者の墓のすぐそばのケリシウムという名の村に、親族関係  
によって相続した地所を所有していた。彼はここに地主としてやって来ると、ただちにこれらの件を知ったので、聞いた  
ことどもを細心に思いめぐらせはじめ、さらにかくもこれらがひろまり得た理由を知るために、詳細な調査によって探索  
しはじめた。現存する人々や古人たちの物語りを聞き、さらにまた奇蹟の証言を聞き、はたまたその場所で説明をうけた  
彼は、事柄が極めて真実であると結論したので、信心深く熱心な努力をかきねて、聖殉教者の側からは恩寵が来るよう  
に、また聖殉教者には、彼の財産の一部をもって威信がまし加えられるようにと熱望しはじめた。その結果はなんと、そ  
れまでは整えられていなかったこの地所のなかに、彼は、神の力に励まされて、キリストの母である聖処女の誉れのため  
に、教会堂を創って聖別し、集落を作り、聖職者たちを置き、それぞれが必要とするものを備えたのである。そしてつい  
に彼は、信仰と、全き恭敬の情とをもって聖者の墓に赴いてひれ伏し、聖務とミサの儀式とを挙げて、神と聖殉教者と  
に、彼が努力して来たことを成就することを彼に許したまうように祈り、聖殉教者が横たわっていた場所から、多量にし

て極めて豊かな聖遺物を、おののきつつ、詩篇を詠誦しながら採取した。こうして彼は遺体を昇床に横たえ、歎喜のあまり足の踏むところを知らなかったが、しかもこの聖なる業については何らの困難にも妨げられずに、卓越した殉教者の崇敬のために彼が準備した石棺のところへ到着した。その中に彼は、神に感謝を捧げつつ、貴い遺体をうやうやしく納め、教会財産として教会と殉教者自身とに対して、地所のすべてと従属民とを寄進した。かくて彼は、彼の誓願がかなえられたことにつき、盛大に神と聖サヴィヌスを讃えかつ祝いながら、誇らしげに教会堂を出たのである。

7、それ以外に彼は、その生存中を通じて贈物をささげ、教会所有地をふやすことを止めなかったもので、これらによってこの場所は豊かになり、また発展した。さらに貴人の多くは彼のまれなる活動に倣って、財宝を増し加え、自有地をささげたから、この場所は多くの寄進によって光輝にみちた。またこの場所には修道士の戒律ノルマが課せられたので、耕作が進むにつれて、この場所はますます崇敬をうけるようになった。しかもこの場所は、森や果樹の美しさが楽しみをましても、牧場と葡萄園、水流と水車とをもって巧みな配置が行なわれていたし、現在もそうである。

8、そこで修道士たちが、聖務を果した後に、彼らの義務である手仕事シゴトを注意深く励行することによって、住居全体が教会とともに、より高貴な、またより大いなる外観をもって聳え立った。彼らの善と秩序とにみたされた修道生活は、神と聖殉教者と共に助けられて、ここに多くの人々の、特に有力者たちの心をして、この場所について想い、なかんづくこの場所に献物をなすべくおだやかに誘なうものとなっていたのである。この修道院はかかるものとして栄えたし、かかるものとして今日まで善業の果実をたわなに実らせているが、さらにかかるものとして永遠にイエス・キリストのうちにあらんとことを、筆者は願いかつ望むものである。



(1) ベネディクトゥス戒律において手仕事 (opera manuum) は、冬期には三時課 (八時一五分〜三〇分) と九時課 (二時一五分) との間に行なわれる。夏期は一時課の終了後第四時頃までと、九時課終了後晩課までとに行なわれる。(Regula Ben., c. XLVIII.)

col. 1054

9、彼の遺体の奉遷の後に、彼の聖なる聖性を最も明確に示すために特に生じた不思議は、思うに、他の思慮なき人々によつては、奇蹟であつたとは認められていないらしい。何故ならば、そこから聖者が、遺体としてではあつても、移された場所を、バイディルスはそれにもかかわらず、顧みることを怠つたからである。さて司祭ポニトゥスは、聖殉教者の遺体が運ばれたのと同じ道を通つて、未発酵の葡萄酒を積んだ荷車を押して行つたが、家にたどりつく前に、栓が抜けて、誰も気がつかぬうちに、荷車の床から地面にこぼれ落ちた。しかも葡萄酒は、あたかも栓が閉じていたかのように、一滴たりともこぼれずに、そのままであつた。そして荷車が貯蔵庫につくや、司祭は近よつて、すぐさま樽を、一体何が起つたのかと点検し、孔があいて栓がないのに気がついた。彼はその中に葡萄酒が全然残っていないと判断しかつ恐れながら、激しい怒りに駆られて召使いたちを、何故にこのことに少しも注意をはらわなかつたのかと、不機嫌がもたらす厳しきをもつて叱責しはじめた。彼がひどくがにがしい思いでこつこつと、一人が来た道を駆けもどつて、あまり遠くないところに落ちていた栓を地面から拾ひ上げて、樽にうがたれていた孔にあてがった。これを押しあてると、なかにおしこまれるまでもなく、葡萄酒の激流がまっすぐにほとばしり出て、栓をさしのべていた者の鬚や胸にまで飛んだ。司祭とその傍にいたものたちとは、これを見たことで奇蹟を示されたために、熱狂のあまり呆然となつて、天にまします創造主とその聖殉教者サヴィヌスとに、彼らすべての讚美の声を、双手をかかへて、歓声とともに献げた。そして司祭はその真盛りに、この栓を樽にとりつけたが、その際に葡萄酒を得たので、喜んでより一層の誓願と祈りにより感謝を献げた。このことは、他のことどもとともに、同じくポニミウスが、前に述べた彼の伯父から、しばしば聞かされた物語りによつて知るにいたつたと断言したところである。

(1) «*Ucillus*..... *egressus*». *Du Gauge, Glossarium, v° «Ucillus», Ducilis, Epistomii vertibulum.* 用例としてこの箇所のみが引用されている。

10、とは言うものの我々は、何故にこの聖者について、多くのことを集めて書こうとするのであろうか。一体我々は、このことよって、彼をより大なる功德あるものとなし得るのであろうか。例えば我々は次の様な例を挿入しよう。おたがいに内側にむかって彎曲していた足が、聖者に祈るや否や、天の憐みによってまっすぐになったギボルドゥスについて。また彼の遺体はその傍に留まって、彼にそれが寄進されるまでは、どうしてもそこから動かなかったかの葡萄園について。あるいはその他に、手がながい間麻痺していたが、眠っている間にフランキアの地方から運ばれて来て、ここで殉教者の仲たちによって即座に癒されたものについて。あるいはさらに三十年来視力をうばわれていた盲人について。彼は三百六十カ月を経過した後、正しくここで光を得、目明きとなり、喜んで帰って行った。これらの、また同様な奇蹟は、殉教者の慈悲によつて、彼の墓のある教会堂で病人たちに起つたが、もしもすでに述べたように、癒されたものたちの名前や、彼らがそこで生れ、あるいはそこからやつてきた生国や村を、度をこえたやり方で書きならべはじめたり、朗読する気になったとすれば、私にも、温和な読者にも、また熱心な聴衆にも耐え難い思いをさせることを、私は否定しない。何となれば節度こそが、神的著述や聖者伝を書かんとする際には守らるべきであり、もし我々がその聖人について短かく物語つたとしても、何故に我々が僅かな言葉をもつて彼の功德や力による恩寵を毀損するがごときことがあり得るのであろうか。よつて我々が祈りまつるは、この奉遷の記が、このように相応しく遷されたまうた聖サヴィヌスこそが、価高く誉れにみちたキリストの殉教者であることを述べ、かつ些か強調するに足るものであることである。彼自身はもとより、キリストを言いあらわしたものがすべて、証しの聖者と呼ばれるのは正しくはあるが、むしろ彼らが、キリストのために血を流したことの故に、殉教者と呼ばれるを欲することこそ、神と聖サヴィヌスとに献ぜられたこの修道院の何

者に対しても、聖霊が啓示をもつて示さんとしたまいしところである。

col. 1056 col.1055

11、彼は功徳において富み、祈りにおいて豊かでありたまうが故に、我ら卑しきものどもは、殉教者となりたまひ、さらに天にて殉教の勲により冠をうけたまうた彼が、我らの魂と肉体との救済のために執なすを志したまわんことを、彼に對して祈りかつ懇願したてまつる。これすなわち彼とすべての聖者たちとの祈りによって、主御みずから、我らの罪咎を消滅させたまひ、あるいは犯した罪をあまねくゆるしたまい、永遠の栄光と生命とを、世々にわたりて彼に与えたまわんがためである。アーメン。

# LEGENDES DE SAINT SAVIN, TRADUCTION JAPONAISE

—Etudes sur l'histoire de l'Abbaye de  
Saint-Savin-sur-Gartempe I—

Hiroshi MORI

Du 18 octobre 1969 au 27 janvier 1970, la *Mission japonaise d'Etudes de l'Art médiéval en France*, dirigée par M. le Professeur I. Yoshikawa, a été envoyée, sous les auspices du Ministère de l'Education Nationale, pour les études sur l'abbaye de Saint-Savin-sur-Gartempe(Vienne). Je me suis occupé là des inscriptions et documents, parmi lesquels je traduis en japonais les légendes de saint Savin.

I. Préface à la vie de saints Cyprien et Savin, par Gausbertus, abbé de Saint-Cyprien de Poitou (Martène et Durand, *Thesaurus novus Anecdotorum*, t. I, Paris, 1717, col. 151.). Martène et Durand datent cette oeuvre de 1029, mais elle pourrait avoir été rédigée à la fin du XI<sup>e</sup> siècle après la rédaction de la *Passio* elle-même, peut-être à l'abbaye de Saint-Cyprien.

II. La *Passio* de saint Savin et saint Cyprien (*AASS.*, Julii, t. III, [die duodecima], Paris et Rome, 1867, pp. 184-189.). Ce texte a été transcrit du bréviaire manuscrit particulier au monastère de Sainte-Catherine de Brescia. Nous avons, cependant, à la Bibliothèque municipale de Poitiers, un autre texte dans le Recueil des manuscrits de Dom Fonteneau, t. LXXX, pp. 383-393, qui est d'une écriture très fine appartenant peut-être au commencement du XVII<sup>e</sup> siècle. Ce texte-ci est beaucoup différent par les détails et, à mon avis, est supérieur à celui des Bollandistes. La rédaction de la *Passio* pourrait être fixée au troisième quart du XI<sup>e</sup> siècle, et attribuée à un moine de l'abbaye de Saint-Savin.

III. La *Translatio* de saint Savin, (Migne, *Pat. Lat.*, t. CXXVI, Paris, 1852, col. 1051-1056.) attribuée à Aimoin, moine de l'abbaye de Saint-Germain-des-Prés. Un abbé «memorandus Hucbertus» est mentionné

dans ce texte, que nous ne pouvons point trouver parmi les abbés de Saint-Savin. Mais il y avait deux Hucbertus, l'un, abbé de Saint-Martin-de-Tours (an. 862), l'autre, celui de Saint-Germain-des-Prés (an. 892). On pourrait attribuer la rédaction de ce texte à un moine de Saint-Germain-des-Prés au X<sup>e</sup> siècle (au XI<sup>e</sup> siècle d'après Molinier).

En travaillant à Saint-Savin-sur-Gartempe et à Poitiers, M.R. Crozet, Professeur honoraire et fondateur du Centre d'Etudes supérieures de Civilisation médiévale de l'Université de Poitiers, M. E.-R. Labande, Professeur et Directeur actuel de ledit Centre, M<sup>me</sup> Y. Labande-Mailfert, M. R. Favreau de l'Université de Poitiers, M. Guérin, Bibliothécaire de la Bibliothèque municipale de Poitiers ont bien voulu m'offrir les renseignements et conseils précieux. Pour achever cette traduction, l'appui de M. K. Kawaida, Professeur de l'Université de Fukuoka et M<sup>lle</sup> C. Kishi, Assistante à la Faculté des Lettres de l'Université de Kyushu a été inévitable. Que tous veuillent bien trouver ici l'expression de ma profonde reconnaissance. Ainsi je voudrais dédier ce pauvre résultat à Monsieur le Professeur I. Yoshikawa, Directeur de ladite *Mission* et mon maître. Qu'il veuille bien l'accepter !